

水を抜くと「くせ」になる？

膝の水（関節液）は、関節内の滑膜という組織が常に産生と吸収を行い、通常バランスがとられています。膝に色々の炎症が起こればこのバランスが崩れ、関節液がたまる（関節水腫）ようになります。関節液を抜いても、関節の炎症状態が持続していると、関節液がまたたまってしまいます。このことは、抜くこと自体が原因となって水がたまる、つまり「くせ」になるということではありません。

関節液を抜く目的には、主に次の三つがあげられます。一つ目の目的は診断のためです。変形性膝関節症による関節液の貯留が多いのですが、それ以外にも関節リウマチや外傷や感染やさまざまな疾患があります。通常関節液以外に血液であったり膿であったり、疾患それぞれに特徴のあるものが貯留します。抜いてその成分を調べることにより診断がはっきりします。二つ目の目的は悪化の予防のためです。関節水腫が持続すると関節包や靭帯がゆるみ膝関節の不安定性が増し変形が助長される恐れがあります。その予防のために関節液を抜きます。三つ目の目的は関節液を抜いた後に薬剤を入れることがありますが、薬剤が希釈されずに効果を高めるようにするためです。

水を抜くと「くせ」になるという誤った考えにとらわれることなく、よりよい治療を受けましょう。また、注射が怖い人もありますから、遠慮せずにかかりつけの先生に相談してください。